

創立 30 周年を迎えて

1977. 4. 1 創立の我が多摩虫は本年を持って 30 年目の節目を迎えました。振り返ってみるといろいろありましたが、現在創立時の会員 18 名中 6 名の方が今尚頑張っております。当時会場も八王子、吉祥寺のマイアミと言う喫茶店を交互に使って例会を行なっていましたが、それらもうとうになくなっております。始めの会費は月額¥250 でした。会報は年 1~2 号程度の発行で推移し本年これまた節目の 50 号を迎えます。連絡誌‘ミニたま’は毎月欠かさず発行され今号を迎えております。途中、若手の作った例会報やミクロタマムシなどもありましたが、彼らの成長や私事の都合により途中ストップとなってしまったことは残念です。1981. 3 には 10 周年を記念してオールカラーの 10 号記念会誌も発行しております。採集会、調査会等も数多く計画されヒットは 1984. 2 に八王子市西寺方町角栄団地脇の丘陵で始めてウラキンシジミの卵を確認したことだと思います。1900 年台には現在の武蔵野公会堂に例会の拠点を構え、会費も現在の水準に設定されております。その間、日本産蝶類食餌便覧（1990. 2）八王子市の蝶（1995. 5）も発行されております。この頃まで忘年会、新年会等も毎年行なっておりましたが、いつしか参加者が少なくなったことと、虫屋は飲むこと自体は好きなのであまたの会で何処でもおこなっており、それ自体に窮することは無く、かえってやらない方がオリジナリティーがあってユニークではないかと言う結論の元当会では今では計画されておられません。

現在、会員は 130 名に達し会の名も広まって各種活発な活動が行なわれております。これは代々の役員の方々そして会員の皆様の情熱とたゆまぬ努力の賜物と感謝いたしております。今後とも多摩虫の発展のため共に頑張ってください。

30 周年祝賀パーティー速報

2007. 3. 11 総会終了後、PM. 5:00~吉祥寺東急インにて、出席者 63 名（これは全会員の約半数になります）をもって 30 周年祝賀パーティーが盛大に催された。

会長挨拶後、ミニ講演（藤岡知夫氏）乾杯音頭（大島良美氏）景品つきクイズ大会、北川、栗山両氏のギター演奏つき歌ありの盛りだくさんの内容で和気藹々と楽しい 2 時間であった。胸に記念ロゴ入りのワッペンを胸につけ記念撮影後、閉会の言葉（松田邦雄氏）で締めくくりとなった。

手土産として袋が手渡され、中には 30 周年記念出版の‘東京都の蝶類データ集、会報 NO. 49、記念絵葉書’の他、極めつきは蝶紋つき紅白饅頭が入っていたことである。まあ、歌くらいは考えられるが、紅白饅頭がでたと言うのは虫会広しと言えども当会が初めてではなかろうか、当会のおおらかさとユニークさの面目躍如たるものがあつた。ここに記念写真とスナップを掲載して、種々な都合で残念ながら参加がかなわなかった方々に雰囲気だけでも味わっていただければ幸いである。





* 新刊

蝶-蛹のなぞ	平賀壮太	トンボ出版	¥1800	06-6768-1337
蝶類年鑑 2006		蝶研出版	¥12000	072-627-9828
東京都の蝶類データ集		グループ多摩虫	¥2500	0422-22-7566
新ヤツタカネ物語	八津高嶺	六本脚	¥6800	03-5625-6848
Butterflies of Thailand	EK-Amnuay	木曜社	¥12600	03-3324-1153
女子中学生のサイエンス	清邦彦	南陽堂	¥500	011-716-7537
富山のギフチョウ	大野豊	自費出版	¥9000	0766-56-4300

* 例会日変更

会場の都合により、7月は第4火曜日（7/24）8月休会はすでにお知らせしてありますが9月も祭日の連続で第2火曜日（9/11）となります。ご確認のうえお間違いなきよう宜しくお願い申し上げます。

松伯美術館花鳥画展

大賞に長田さん「花奪い」



長田佳子さん

若手日本画家の育成を旨とする松伯美術館（奈良市）の公募展「第13回松伯美術展花鳥画展」（近畿日本鉄道、読売新聞大阪本社主催）の入選作が発表され、台東区上野桜木1、長田佳子さんの「花奪い」が写真展（23）の「花奪い」で写真展が最高の大賞に輝いた。

「初めて公募展に応募して、まさかいきなり大賞を取れるとは思いませんでした」と驚きを隠さない。

「繊細な美」だったと云へ「はなばい」という言葉の響きに引かれて絵の構図に取り入れた。

受賞作品の「花奪い」は、上野・寛永寺で8匹の子ヨウがスイフヨウの花を奪い合っている様子を描いた。

父親の仕事の関係で2歳まで仏・パリで生活。絵を描くことが自然な街の雰囲気、自宅によく筆を持ち続け、東京芸術大絵画科に進んで油画を専攻した。

岐阜県郡上市の長滝白山神社で毎年正月、福を求めて花がさを奪い合う行事「花奪い」が行われているのを新聞で知った。スイフヨウの花言葉が「富貴」

を題材に選ぶことが多かったが、4年時に和紙に描かれた平家納経を見て感懐し、和紙を使って作品を描くようになった。

卒業後は、身近な自然に目が向いた。人間が一人一人違うように、同じ種類の草花でもまったく形が違い、人間と同じように魅力を感じるようになった。

昨年3月から、寛永寺や上野公園、自宅近くでひたすらデッサンし続けた。何か集大成となる作品をと思い、120号の和紙に描き上げたのが今回の応募作品だ。

「これからも和紙を使う。」

「いろんなものを表現していきたい」と自分の作品の幅を広げる意欲に満ちている。



スイフヨウ求め チョウの舞